

平成31年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる
「共同利用型」の個人による研究 研究報告書

令和2年4月13日現在

研究課題名	レオニード・クラージンとアレクサンドル・ボグダーノフ	
申請者	氏名	所属機関・職
	梅村 博昭	

研究成果の概要

初期ソ連で流行した医学的な若返り術の文化的意義を調べると、このテーマが「不死」のテーマとも無関係ではないことがわかる。ポリシェヴィキの哲学者であり医師・SF作家であるアレクサンドル・ボグダーノフが血液交換の実験を自らに施して死亡した有名な事件もそのテーマの中で取り上げられるべきものと言える。ところで、ボグダーノフは医師とはいえ大学で精神医学を専攻し、決してロシアの血液学研究の主流にいた医学者とは言い難い。そのボグダーノフが1926年に国立輸血研究所の所長となるにはポリシェヴィキの政治人脈が関わっているという指摘がある。N・クレメンツォフ『地球に漂着した火星 人 アレクサンドル・ボグダーノフ 輸血・プロレタリア文化』（シカゴ大学出版局、2011年）の指摘によれば、通称人民委員を務めたレオニード・クラージンがロシア革命前後の激務で疲労困憊していたのをボグダーノフが輸血の施術によって治療し、その評判がスターリンの耳に届いたことがきっかけとなってボグダーノフは輸血研究所の所長に抜擢されたという。またこのクラージンはレーニンの死後、葬儀を取り仕切り、レーニンの遺体を保存することを主張したのである（佐藤正則『ポリシェヴィズムと”新しい人間” 20世紀ロシアの宇宙進化論』水声社、2000年）。さらにはボグダーノフのユートピア小説『赤い星』の主人公レンニのモデルはクラージンその人であるという指摘もある。そこでクラージンの人物像やボグダーノフとの接点を知るべく本申請を申し込んだ。滞在は九月と二月の二回に行き、クラージンの評伝、研究書数冊（英文、露文）を閲覧し、必要箇所を複写した。またポリシェヴィキの思想家ではないが社会革命党のテロリストで作家のサヴィンコフ（筆名ロープシン）とクラージンの接点も知ることになり、サヴィンコフ関係の書籍も多数閲覧し、複写を行なった。これら資料を読み込んで今後のこれらの思想家の相互関係を立体的に明らかにしたい。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

複数の翻訳の作業中ですが、現在のところ刊行に至った成果はありません。

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。